

# ジンバブエにおける 活動報告及び今後の展望

神田外語大学 外国語学部 英米語学科

佐久間大樹

# 目次

- 派遣概要・・ p3
- 派遣国概要・・ p3
- 配属先情報・・ p4
- 活動情報・・ p4
- 活動地域における競技環境・・ p5
- 今回の活動における成果・・ p6
- 支援継続の必要性・・ p6
- 現地における日本への認識・・ p7
- 現地における生活・・ p7
- 今回の活動の感想・・ p9
- 今後の展望・・ p9
- 参考資料・・ p9

## ● 派遣概要

- ・ 派遣形態：JICA 青年海外協力隊短期ボランティア
- ・ 派遣国：ジンバブエ
- ・ 派遣隊次：平成27年度 9次隊
- ・ 派遣期間：平成28年4月5日～平成28年5月6日
- ・ 派遣職種：野球
- ・ 活動概要：ジンバブエ国内各地で、野球普及・指導員として、野球のレベルアップ及び普及を目的に選手、生徒、学校教師に対してクリニックの開催や指導を行う。

## ● 派遣国概要

- ・ 言語：英語（公用語）ショナ語、ンデベレ語
- ・ 人口：1524万人
- ・ 面積：38.6万Km<sup>2</sup>
- ・ 首都：ハラレ
- ・ 通貨：米ドル
- ・ 経済

1980年代から1990年頃にかけては“アフリカの穀物庫”と呼ばれ小麦の生産が白人の大規模農家によって行われ、ヨーロッパ諸国と肩を並べるほどであった。しかし、白人からの恩恵が受けられなかったことなどから、1992年に白人から農地を強制的に奪還する土地収用法が可決され、ノウハウを持った白人の消滅、大規模農業システムの崩壊が起これ、外貨不足が引き起こされ部品等を輸入していた工業産業にも影響があらわれ経済が悪化していった。2000年頃からインフレーションが始まり、2009年に対米ドルレートが1米ドル=250億ジンバブエドルとなり、政府が正式に米ドルや南アフリカの通貨ランドの流通を認めた。2015年にジンバブエドルの廃止が決定され、米ドルとの両替・回収が行われたが、その際のレートは1米ドル=3京5000兆ジンバブエドルであった。

### ・ 政治

1980年に独立後、ロバート・ムガベ氏が首相、大統領として主導してきている。独裁国家との認識が欧米諸国でなされているが、報道や表現の自由は保障されており風刺的な表現の見出しの新聞記事などを街中で見受けることもあった。

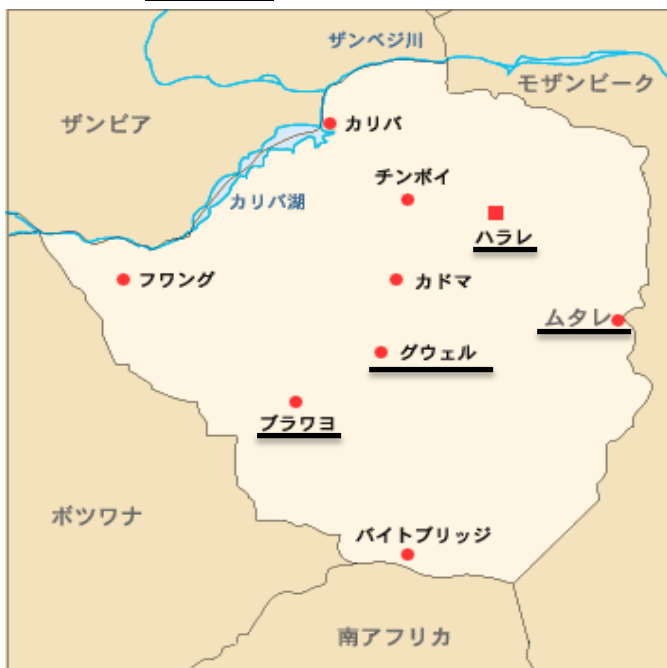
- ・ 観光名所：ヴィクトリア瀑布（世界三大瀑布の1つ）
- ・ 平均月収：教師の平均月収は約400米ドルと言われ、一般市民の平均月収は250米ドルと言われている。

● **配属先情報**

- ・ 配属先が属する省庁名  
スポーツ・芸術・文化省  
Ministry of Education, Sports, Arts and Culture
- ・ 配属先名  
スポーツレクリエーション委員会 ジンバブエ野球協会  
Sports Recreation Commission / Zimbabwe Baseball Association
- ・ 配属先事業概要  
各種スポーツの普及、推進を担う公的実施機関である SRC の下部組織で、子供から大人までを対象に野球の普及、大会企画実施、ナショナルチームの編成、派遣などを行う。
- ・ 配属先の JICA ボランティア受入状況  
1992 年より JICA ボランティアの受け入れを開始。しかし、2008 年経済不安によりボランティア撤退。2014 年より野球隊員の派遣再開。短期ボランティアは派遣再開後 2 度派遣。

● **活動情報**

- ・ 活動対象：小学生から高校生、社会人までの選手及び教員
- ・ 活動場所：ムタレ、グウェル、ブラワヨ、ハラレの四都市における高校のグラウンド



- ・ 活動内容
  - ムタレ：中学、高校及び教員養成校の教員を対象に 5 日間コーチングクリニックを開催。野球の知識のない参加者が大半を占めていたため映像を用いながらルールの説明、送球、捕球、打撃、走塁などの基礎知識、野球に必要な筋肉やストレッチングの説明などを行う。参加者数は約 30 名。

- ▶ グウェル：地域の野球チームを対象に5日間練習会を開催。高校生以上の選手に対し守備、打撃を中心に指導を行い、小学生に対しては初心者だったこともあり別メニューにて送球、捕球、打撃、走塁などの基本動作の指導とキックベースを用いたルール説明などを行う。また、Adventure Communication Program(以下 ACP)を活用したアクティビティを行いチーム力の向上を図った。参加者数は約20名。
- ▶ ブラワヨ：高校生以上の選手、コーチを対象に7日間練習会及びコーチングクリニックを開催し、最終日にトーナメントと JICA ボランティア、在ジンバブエ日本大使館員チームとの親善試合を開催。最終日のトーナメントに向けた実戦練習、チーム分けを実施。ACP を用いてチーム内の関係構築を図った。参加者数は約40名。
- ▶ ハラレ：地域の野球チームに所属する選手を対象に2日間練習会を開催。守備、打撃を中心に指導を行う。参加者数は約10名。

## ● 活動地域における競技環境

### ・ 貧困の問題

練習または試合会場まで移動する際にかかる交通費や昼食代が支払えないなどといった理由で参加できないまたは参加しない選手が各都市で見受けられた。その際、金銭的に余裕のある参加者が交通費を貸与して選手を練習に参加できるよう援助する様子があった。

### ・ 練習設備、備品

- ▶ 野球用具がジンバブエ国内で手に入れることは困難で、使用されている用具は他国で購入した用具または寄贈品であり、ほとんどの用具が中古品である為に非常に壊れやすい。また、用具が壊れた際に修繕する費用がない上、修繕する知識を持つ人が少ないために直せないといった問題も見受けられた。しかし、ユニフォームやスパイクを着用している選手は多く、その入手先は地元の市場などで売られているアメリカや中国から輸入された商品で、適切なサイズのものでないことがほとんどである。
- ▶ ベースも市場等で安く売られているフェルトや工場で使用されていたベルトコンベアのゴムを切り取ったものを使用している。メジャーのあるチームもほとんどなく塁間などの距離を計測する際は歩幅や靴のサイズなどを利用して大まかな距離でグラウンドづくりを行う。バックネットなどネットがないためティー打撃等はできない。

### ・ 練習場所

競技を行うグラウンドに関してもジンバブエ国内に現在使用できる野球場はなく、サッカーグラウンドや地域の空き地などで野球の大会も行う。草の生い茂るグラウンドやたくさんの石が転がるグラウンドで練習を行うため、練習前に石拾いや草刈りをするように指導した。

## ● 今回の活動における成果

### ・ 活動における成果

少数ながらジンバブエ国内における野球人口の拡大、ストレッチング、グラウンド整備の重要性を伝えることができた。

### ・ 今後継続していくことで成果を期待できる活動

- ▶ ムタレ：学校の先生を対象としたコーチングクリニックを行い、授業やクラブ活動を通して野球が取り込まれ同地域内での競技人口の増加、競技の活発化が期待できる。しかし、ほとんどの参加者が野球未経験であったため間違った指導がされる懸念があるため、長期隊員または現地の野球経験者が継続的にクリニックの開催、各校を巡回する必要がある。
- ▶ グウェル：野球の技術指導以上にチームワークの重要性を伝えた。ACPのアクティビティを活用し、全員で成功に向けて意見を出し合い協力するスキルを養いました。今後、このアクティビティで学んだことを応用して野球に活かしていくことで組織的な戦略やチーム力の向上に繋がり、レベルアップが期待できる。
- ▶ ブラワヨ：基本的な技術指導に加え、試合を通して戦略などより実践的な指導ができた。さらに、グウェル同様にACPを行ったため参加していたコーチが活用していくことでナショナルチームなど新たなチームを編成した際に活用されることが期待できる。

## ● 支援継続の必要性

### ・ 人的支援

今後、配属先への支援の継続は一概に必要なとは言えないと考える。なぜなら、野球協会としては継続的な支援を望んでおり再び野球を活発にしたいと考えているが、競技を行う選手たちの考えは楽しく遊びに近い感覚で野球に取り組んでいる。正直、楽しく野球に取り組んでいる中にいきなり野球を教えるために日本から来たという外国人がやってきて、いろいろと指導を行うことやレベルアップを目的とした練習を組み込ませることが果たして本当に必要とされているのか活動を行った中でわからなくなった。一度、ボランティアが撤退し再開したばかりということもあるのだろうが、今後どのような観点から支援を継続していくのか考えなくてはならないと思う。

### ・ 物的支援

用具などについては継続して支援を行う必要があると考える。野球を授業に取り入れたいと考えている学校の多くは用具を購入するための予算を捻出できないため、用具の提供をすることで更なる競技人口の拡大が可能となる。また、野球用品のみならずバックネットやレイキ、トンボなどのグラウンド整備に使う用具や設備の設置方法など知識の提供も必要である。

## ● 現地における日本への認識

### ・ 日本への印象

ジンバブエ国内を走る車の多くは日本でかつて使われていた中古車で、10年以上前の車やエアコンや内装が取れてなくなってしまうような車も走るからという理由で使われていた。またパソコンやスマートフォンなどの電子機器も日本製品が人気を集めている。草の根事業と呼ばれる日本大使館主導の支援などによりインフラ整備や学校の設備整備、建設などが行われている。これらのことなどから日本への信頼や愛着が感じられた。しかし、日本人がアフリカ各国の位置や言語に関しての知識が低いことと同様に現地で日本についての知識を問うと様々な答えが返ってきた。

- 日本は中国の植民地（中国と台湾の関係と同じ認識の人もいる）
- 日本、韓国、中国は同じ国
- ジャッキー・チェン、ブルース・リーは日本の有名人
- カンフー、テコンドーは日本発祥の競技（道着を着るものはすべて日本）
- 忍者、侍が現在も存在する（漫画 NARUTO が影響している？）

### ・ 日本人に対する認識

日本人に対する現地における認識はかなり好意的なものであった。街中を歩いている際には"Chinese"と声をかけられることもあるが、日本人だと伝えると知っている日本語を話してきたり、空手や柔道の稽古をつけてくれないかと頼んできたりと悪い印象は持っていないことが伺える。野球の活動を通して交流のあった現地の方々には以前の野球隊員を知っており、長期隊員のサポート役として私がやってきたということで温かく迎え入れてくださり活動を行いやすい環境を作っていただいた。また、ジンバブエ野球会の方々の継続的な支援を随所で感じ、現地の野球関係者と日本の繋がりが密接なものがあり、彼らにとって日本人は野球をする上で必要な存在なのだと思う。しかし、用具を寄付してくれるから必要なのだという認識が少なからず植えつけられており、練習において、レベルアップにおいて日本人の協力が必要不可欠な存在であるという認識をより多くの人に広めなくてはならないと思う。

## ● 現地における生活

- ・ 食事：食事はメイズ（トウモロコシ）の粉を水と合わせ加熱しながら混ぜ合わせた“サザ”を主食とし、牛肉や鶏肉のシチューと共に食べる。価格はシチューとサザのセットで2ドルから。貧困層は“マドラ”と呼ばれる蛾の幼虫を主なタンパク源としている。街中にはチキン、ピザ、パンなどを展開するチェーン店が数多く出店していた。チキンは2ドルからでピザの値段は日本とさほど変わらない。
- ・ ライフライン：水道、電気は地域によって定期的に止まる。そのため、ホテルや学校には貯水槽や発電機が設置されている場合が多い。ガスはLPガスを使用しており、入手場所は街中のガソリンスタンドや小売店などである。

- ・ 通信：国民の多くが携帯電話を所有している。携帯使用料は小売店や街中の露天商からカードを購入し、チャージする。Wi-Fi がホテルやカフェ、学校などで通っておりデータ通信が可能であった。
  
- ・ 交通
  - コンビ：  
街中などの短距離の移動に利用するミニバス。運賃は地域や距離によって異なるが基本的に 50 ㊦。時刻表などはなく、満員になるまで出発しない。定員は約 15 名であるが無理をして 20 名まで乗せる場合もある。
  - タクシー：  
街中を走っている多くのタクシーは白タクである。正規の値段より安く乗れることが多いが、注意も必要。信頼の置けるまたは仲良くなったドライバーを呼び出し、使うことが多い。
  - 鉄道：  
1 ヶ月の滞在中に利用することはなかったが、ストライキでほとんど動いていなかった。長距離移動の際に夜行列車を利用すると安く移動できるらしいが、車で 4 時間の距離も 12 時間かかる。
  - バス：  
長距離移動の際に利用する。運賃によってランク分けされており、安いものは時間通りに運行されない上、バンのような車であることが多い。
  
- ・ 市内の様子
  - 道路：  
市街地の道路や幹線道路はアスファルトで舗装されているが、所々穴が開いており、ひどい所ではまっすぐ走れない。道路工事も日中の時間帯に行うため、工事中は主要な道路でも通行止めになる。また、信号機も故障してついていないものもしばしば見受けられる。
  - 商店：  
スーパーや洋服店など品揃えはかなり良い。各街には市場があり、青果や衣類、電子機器類までありとあらゆるものが手に入る。しかし、衣類や電子機器類は偽物が多く、耐久性や品質がかなり低い。
  - 建造物：  
首都ハラレの街中には高層ビルや大型のショッピングモールなどがあり、一見すると新興国のような雰囲気である。車も多く走っており、そのほとんどが日本からの中古車でその他にヨーロッパ諸国の高級車も数多く見られた。

## ● 今回の活動の感想

活動を通してスポーツというものは万国共通のコミュニケーションツールになり得るものだった。人種や言葉、宗教、環境など様々な点で異なる人間同士が、同じグラウンド



で体を動かし1つのボールを追いかけることで壁はなくなり、グラウンドに立つ全ての者が笑顔で楽しそうにプレーをすることが自然とできることを学んだ。このことは野球に限らず全ての競技に共通することであり、世界各国がオリンピックやワールドカップに熱中する理由であると思う。これまで日本の中で外国の方とスポーツ通訳ボランティアを通じて交流してきたが、あくまで運営側であるためこの魅力に気づくことができなかった。しかし、実際にともに体を動かすことで身をもって感じることは今後の人生においても大変貴重なことであると思う。また、アフリカの国に行くということ自体が大変貴重な経験だと思う。1ヶ月のみではあったが、現地での慣習、文化、食事など日本には知りえない多くのことを学ぶことができた。インターネットを利用すれば様々な情報を手に入れることができるが、実際に見聞きしないと正しい情報を手に入れることができないと痛感した。

#### ● 今後の展望

今回感じたスポーツの魅力を同じ大学に通う生徒やこれまでお世話になった高校や中学校の先生や生徒に伝えていくとともに、継続して現地の方々と連絡を取り競技に関する情報の共有や意見交換などを行っていききたい。また、JICA 青年海外協力隊長期隊員として活動し一人でも多くの人に野球に限らずスポーツの持つ魅力を発信し、東京オリンピックを世界各国から多くの注目を集める大会になるよう盛り上げていきたいという思いが今回の活動を終えて芽生えたため、2016年度青年海外協力隊春募集に応募する。例え、合格できなかったとしても何らかの形で日本の魅力や東京五輪の注目を集められるような活動をしていきたいと思う。

#### ● 参考資料

- ・ 外務省ホームページ ジンバブエ共和国  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/zimbabwe/>